Doctor of Philosophy in Public Health（Ph.D.）

社会健康医学専攻 博士後期課程

［募集人員］2名 ［取得学位］博士（社会健康医学）［Doctor of Philosophy in Public Health（Ph.D.）］
［修了要件］・15 単位の履修 ・博士論文の最終審査に合格　　標準修業年限 3 年

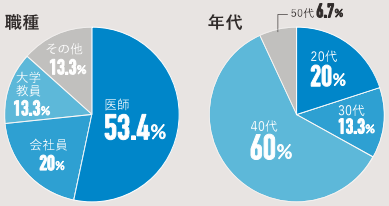
社会健康医学の最前線において未解明の課題に果敢に取り組む研究者を育成

公衆衛生学のコア5領域はもとより、最新の生命科学や情報解析学など関連領域の学識を身につけ、社会が必要とするエビデンスの導出とその社会実装を通じて広く人々の健康に貢献できる能力を修得した研究者を育成します。

求める人物像

1. 健康と医療・環境に対する高い関心と探究心を有し、新たな視点で課題を抽出するとともに、その解決のために必要な研究の立案と遂行に意欲のある者
2. 社会健康医学の最新の研究成果や知見の社会実装を通して、健康課題の解決に取り組む意欲のある者
3. 社会健康医学の博士前期課程（修士課程）修了に相当する学識及び語学力をさらに向上させ、研究やその成果の社会実装を介して学術領域の発展に寄与する意欲のある者

本学入学者の内訳



（2023年～2025年度入学者）

カリキュラム

基礎科目	社会健康医学特講	1年次	土曜 4・5限（年8回）	1単位	社会健康医学の最先端研究の内容や成果、社会実装に対する取り組みなどについて実践的に学びます。
特別演習科目	博士課程セミナー1	1年次		1単位	社会健康医学研究の方法、研究成果、成果の社会実装プロセスを理解・吟味することで視野を広げ、洞察力及び学際性をふまえた研究遂行能力を養います。
	博士課程セミナー2	2年次		1単位	
	博士課程セミナー3	3年次		1単位	
特別研究科目	社会健康医学研究	1～3年次	——	12単位	社会健康医学における具体的な課題を自ら設定し、当該領域の学術的発展に寄与するとともに、実践的な課題解決に向けた方策の提案にも貢献する研究を行います。

※優れた研究業績を挙げた場合は、課程2年次に学位審査を申請することができます。

［履修推奨科目］
本学修士課程を修了しておらず、また他の大学院において公衆衛生学のコア領域を学修していない方には、修士課程の開講科目のうち以下の科目の履修を推奨します。

■ 社会健康医学概論 ■ 疫学概論 ■ 臨床研究概論 ■ 医療統計学概論 ■ 環境健康科学・産業衛生学概論
■ ヘルスコミュニケーション概論 ■ 健康・医療ビッグデータ概論 ■ 医科遺伝学概論 ■ 基礎医学講座（非医療系の修士課程の出身者のみ）

出願資格

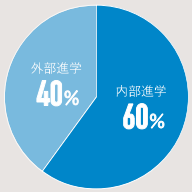
※修士の学位又は専門職学位を有する者（取得見込みの者を含む）
※医学、歯学、薬学、獣医学の6年制の教育課程を修了した方は、個別の出願資格審査のうえ出願が可能となります。
※出願前に、指導予定教員との出願前相談が必要です。詳細は学生募集要項をご覧ください。

キャリアパス

国内外の教育研究機関や研究所、医療機関等において、社会健康医学の最先端研究と成果の社会実装に取り組むことで、我が国のみならず世界が抱える健康課題の解決に果敢に取り組む高度な研究者として活躍することが期待されます。

- アカデミアで社会健康医学を考究するとともに後進の育成に携わる教育研究者
- 国や地方自治体の研究機関において行政施策の立案に必要なエビデンスの導出や施策の社会実装に資する研究者
- 医療機関において臨床医療に携わりつつもその環境を活かして最先端の社会健康医学に取り組む医師等に代表される臨床研究者
- 企業において臨床・予防医療に資する薬剤、製品、サービスの開発と社会実装に資する研究者

内部進学・外部進学の割合



（2023年～2025年入学者）

学生×指導教員

さまざまな専門性を持つ複数の教員が研究を指導する体制を構築。学術領域を越えた幅広い研究指導から、社会健康医学を先導する研究成果が生まれています。

＊掲載されている学年は撮影時のものです。

博士課程へ進学した理由

修士課程で基礎的な研究スキルを身につけましたが、研究のマネジメントやアセスメントに関する経験が不足していると感じました。博士課程では授業が少なく、より多くの時間を研究に充てることができ、内部進学のメリットを最大限に活かして、さらなるスキルアップができると考えました。

医師（臨床検査科医） **朝比奈 彩さん** 博士課程2年＊

教授 **田原 康玄**

研究テーマ・概要

地域住民コホートの試料と情報を用いて、Y染色体欠失と総死亡・循環器疾患発症の関連を研究しています。遺伝子研究に挑戦したいという夢が叶いましたが、期待通りに進まないことも多く、苦戦していますが、これもまた良い経験です。

指導教員との研究の進め方

週1回の研究ミーティング「たばラボ」では、田原先生と学生・研究者が集まり、研究発表や議論を行います。田原先生の疫学・ゲノムの専門的視点からのアドバイスは貴重で、他の研究に触れることも学びになります。研究の進捗確認やマイルストーンとしても有意義であり、大変助かっています。

仕事との両立

市中病院の検査専任医師として管理業務を担い、仕事と研究の両立を目指しています。医療現場の課題を見つけ、学んだことを職場に還元しています。データ解析や論文執筆支援に自信を深め、遺伝カウンセリング外来の立ち上げなどゲノムリテラシー向上にも取り組んでいます。

博士課程へ進学した理由

子宮頸がんワクチンの接種勧奨中止を通じ、科学的エビデンスだけでは行動変容や行政判断を促せないと実感。社会実装や行動変容を促す科学的なエビデンスを導出できる研究者を目指し、博士課程へ進学を決意しました。

准教授 **溝田 友里**

医師（産婦人科医） **市川 義一さん** 博士課程2年＊

研究テーマ・概要

AYA世代を対象に、子宮頸がん予防行動の促進・阻害因子を明らかにすることで、効果的な勧奨プログラムを開発することを目的としました。質問紙調査を行い、子宮頸がんに対する意識、社会背景、情報リテラシーと予防行動意図の関連を分析。分析結果に基づいて開発した集団特性に応じた情報提供方法の有効性を、ランダム化比較試験で検討しています。

指導教員との研究の進め方

平日の夜と土曜日に指導教員とのオンライン会議を定期的に行いながら研究を進めています。日々指導教官がそばにいる環境ではありませんが、試行錯誤する時間と指導・フィードバックを受ける時間が交互にあることで、自立した研究者として成長する学びを得ています。

仕事との両立

修士課程では講義や課題も多く、スケジュール調整が大変でした。博士課程では講義単位が少なく自己裁量の時間が増えますが、仕事に追われ研究時間の確保が難しくなるため、自ら時間を作り出す工夫が求められます。

博士課程へ進学した理由

急性期病院で臨床医療に専念してきましたが、医療を近視的に捉えていることに気づきました。さらに、手技や判断力の伸びが停滞しつつあり、より広い視点で医療を俯瞰する必要性を感じ、社会健康医学を学ぶことを決意。修士課程で幅広く学んだ後、知見を深め、リサーチマインドを養うため博士課程に進学しました。

医師（産科医） **竹原 啓さん** 博士課程1年＊

講師 **佐藤 洋子**

研究テーマ・概要

妊婦を対象としたランダム化比較試験は倫理的に難しく、周産期研究は観察研究が中心です。修士課程ではレセプトデータを用いた観察研究を行いましたが、正常妊婦の捕捉が困難でした。そこで、博士課程では、日本産婦人科学会の周産期レジストリを用いて、「常位胎盤早期剥離の発症リスク因子と周産期予後」に関する研究を行い、母児の予後改善に貢献したいと考えています。

指導教員との研究の進め方

基本はオンサイトで研究相談を行うように努めていますが、オンラインも利用しつつフレキシブルに対応しています。研究に行き詰ったり、わからないことはメール等でも質問させて頂いています。いつも、快く的確に対応して頂き、大変助かっています。

仕事との両立

産科は当直や長時間勤務が多く、研究時間を確保することが難しいですが、隙間時間を活用し少しずつ進めています。職場の理解を得て金曜午後は研究に専念でき、仕事と研究がリンクすることでモチベーションを維持し、業務の質も向上していると感じています。